# CD「珊瑚礁の風　奄美島唄とパイプオルガンの調べ」

持田明美

# 「祈り」を通奏低音に

## 奄美と西洋が融合

パイプオルガンの名手酒井多賀志さんは、一九九一年より奄美島唄の坪山豊さんとコラボレーションを開始、九二年東京での初コンサート以来共演を続け、九八年以降は毎年、デジタルコンピュータオルガンをワゴン車に積んで、船で奄美の島々をめぐるツアーを行ってきた。二〇〇二年には「奄美島唄とパイプオルガンの出会い十周年」記念コンサートを東京・武蔵野市民文化会館で開催。今年、そのライブ録音を含む本CDが完成した。このCDは、島唄とパイプオルガンという異色のコラボレーション作品であり、確実に奄美島唄の歴史に残る一枚になるだろう。

九九年秋の夜、沖永良部島で酒井多賀志さんのパイプオルガンを聴いた時、天上から降り注ぐパイプオルガンの分厚い音に圧倒された。振動する空気に揉まれ、翻弄される。もしかしたらこれを宗教的悦楽と呼ぶのかも？

中世から教会音楽を奏でてきたパイプオルガンは、もともと超越的な存在「神」を感じさせるための楽器といってもいい。一方、島唄は暮らしのなかで育まれた三つの絃と人の声による、風や木々のざわめきといった自然に限りなく近いもの。草木虫魚に「カミ（霊）」が宿るとするアニミズム的な世界に属する。西洋と東洋、和声と単声、歴史も表現方法も対極にあるようなふたつの音楽がどのように融合するのか？

「島唄を包むオルガンの響きが、緑深い山々や海の波のようで、結構いい感じだと思いました」。はじめて坪山さんの島唄と共演したときの印象を酒井さんはこう記す。島唄には人々の祈りや願いがこめられ、霊的な力を秘める。そのミクロコスモスを包むオルガンの響きは、ご自身が言うように森羅万象めぐる季節と太陽や月の運行、宇宙の律動（マクロコスモス）を聴く者にイメージさせる。

〇二年のコンサートを拝見して驚いたのが、音圧も音量も圧倒的なパイプオルガンがごく自然に、坪山さんの唄の背景に溶け込んでいることだった。島唄の後ろに緻密な幾何学模様が描かれていくよう。重厚な音の振動に身をまかせると、宇宙的な律動に身体が同調し、異界へ攫われてしまうようなちょっぴり怖い感覚も覚えた。

酒井さんはどのようにオルガンを島唄に合わせているのか。「十七～十八世紀に盛んだった通奏低音の技法と、多声音楽の作曲法（対位法）です。島唄のメロディに対して、それと調和するバスの旋律を創作して重ね、その間をハーモニーで整え、さらにオブリガートの旋律を一声加えると、極めて自然なサウンドが生まれます」（解説より）。

島唄の旋律をただなぞったり、ハーモニーをつけたりするのではなく、まったく別の旋律をからませるというユニークな発想だ。イメージを固定化しないよう和声のつけ方にも絶えず気を使っているのが、演奏からも伝わってくる。

とくにライブ録音の「綾蝶節」「いきょうれ節」は、臨場感があってスリリング。「神」と「カミ（霊）」。宇宙観を形づくる核はちがっても、島唄とヨーロッパの教会音楽に「祈り」という通奏低音が流れていることを気付かされた。島唄ファンも島唄になじみのない人にも、ぜひお薦めしたい。

（シーサーズ）

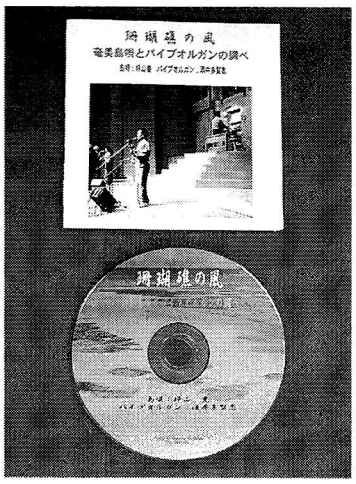
……

CD『珊瑚礁の風　奄美島唄とパイプオルガンの調べ』

島唄／坪山豊他　パイプオルガン／酒井多賀志

「綾蝶節」「やちゃ坊節」「稲摺り節」「ヨイスラ節」「塩道長浜節」「嘉徳なべ加那節」など13曲を収録。2006年　3000円。セントラル楽器、あまみ庵にて発売中。問い合せは☎042・637・1345（酒井多賀志公演会）電子メール tsakai @ t-junshin.ac.jp

酒井多賀志　日本のパイプオルガン奏者のパイオニア的存在。東京純心女子大学教授。秋田聖霊女子短期大学非常勤講師、カトリック吉祥寺教会オルガニスト




パイプオルガンと島唄の共演CD「珊瑚礁の風」